

宇宙はどこまで見えてきたか

—謎だらけの宇宙論—

野本陽代 著

岩波書店, 199 ページ, 1400 円

ミステリー仕立ての啓蒙書である。とは言っても、犯人とおぼしき天文学者に接近するため、探偵が一夜漬けて天文学を学ぶとか、天文マニアが星を観測中に殺人事件を目撃するとか、そんな話ではない。れっきとした啓蒙書である。

ミステリーときたからには、発端は事件でなければならない。それは、表題に示されたとおり、宇宙である。そして、宇宙の起源や構造といった謎を探るため、精力的に行われている証拠探しの様子が、まず第一部で紹介される。もっとも、著者自身が証拠探しを行っているわけではない。証拠探しで成果のあった天文学者に次々とインタビューを試み、その肉声を伝えているのである。80年代に入ってからの観測の進歩は目ざましく、これまでの既成概念を変えてしまうような重大な発見が相次いだ。これらの発見に、とまどい振り回される天文学者の様子を、著者はこまめに取材して回っている。ひと口に天文学者と言っても、いろいろなタイプの人が様々な動機でもって種々の観測装置を使いながら宇宙を探っている。これらの人々の理解がだんだんひとつにまとまり、統一的な宇宙像ができるまでにはいろいろな紆余曲折があることが、自ずと理解されることと思う。

こうして得られた最新の証拠も、それだけを眺めていたのでは宇宙の謎は解けない。これまでに得られている証拠と合わせて、推理の糸を紡いでいかなければならない。これまでの宇宙論の発展の経緯が、第二部で解説される。もっとも、著者の興味は、宇宙論というよりはむしろ人間に向かっているらしく、宇宙論の発展に関わった人間の解説と言う様相を呈している。3Kの宇宙背景放射が発見され、ビッグバン理論が支配的となるまでの状況が示されている。

その後の発展は、宇宙の年齢の決定と暗黒物質の探索という形で、第三部にまとめられる。これは、宇宙の構造を理解すると同時にその将来を予測するためにも必要な情報である。

犯人捜査の証拠集めの段階では、科学の発展の恩恵を受けることが多い。タバコに付いた唾液から血液型を判定したり、塗料のかげらから車種を調べたりなど、ミステリーでは古典的な手法となっている。本書でも捜査方法の進歩がきちんと解説されている。第四部の将来計画がそれである。紹介されている将来計画の半分以上が日本の計画であるが、これは何も、著者の日本の天文学者への期待のなせるわざではあるまい。客観的に見て、日本の天文学の比重がそれだけ増してきたと言うことだろう。このことは、光学望遠鏡だけでなく、電波、赤外、X線、ニュートリノ望遠鏡といった将来計画の多様性からもうなずけると思う。著者ならずとも、どういう成果が出るか血沸き肉踊る思いがするに違いない。

本書はミステリーであるから、謎解きの面白さをそいでしまうような事柄には、ほとんど触れられていない。発見された証拠の解説やその背景となる知識の説明などと言う興ざめなことは全く省かれている。もちろん、そういう事が知りたければ、他の啓蒙書を読めば良いのである。

一方、宇宙の謎を解くために暗中模索している現在、どの証拠が大切でどれが無意味な証拠か判断できない。いきおい、めぼしい証拠はひと通り網羅しなければならないことになる。この点、著者の材料の選び方は、専門家はだしてあり、きわめて公正な目を持っている。ただし、どれが重要証拠か最終的に判断するのは読者自身である。自分の直感的確さを試してみるのも一興かも知れない。

堂谷忠靖 (宇宙研)